

連帯して一人ぼっちの被災者なくしたい

被災地出身のボランティア・伊東勉さんが、夜のミーティングなどで話した内容をご紹介します。

お晩でございます。来ていただいて、本当にありがとうございます。

地震で友だちやふるさとはあんな風になり、最初のころは何もできずに、気が狂うほど辛かったです。大船渡やその隣の陸前高田に行ってみると、全然、自分の知っている街じゃなかった。陸前高田の市街地をみたときは本当にショックで、一時間ほど立ち尽くしました。通りかかった人に声をかけられるまで、何もできませんでした。

友だちを回ってみると、十数人ほど亡くなったり、行方不明になったりしていました。いまワイシャツを着ているのは、今日のボランティア作業後、友だちに手をあわせてきたからです。津波が迫るなか、せっかく出来た家族を助けようと向かい、そのときを迎えてしまいました。私にとって弟のような存在でした。親父がわりと思っていた方も亡くなりました。いろいろな人と無理矢理、別れさせられました。

二日間、みなさんと一緒にボランティアをして、人をつなぐ力はすごいなと感じました。辛いことが山ほどある震災で、うれしいことです。みんなの力で、あれだけモノが流されてきていた浜辺が立派になった。そのこと一つとっても、地元の人たちはうれしいと思います。

職がなくなって大変な思いをしている友人は、それでも生きていかなければ、と歩き始めました。ただ、深く打ちのめされ、そうならない友人もいます。だから、私が大事にしたいのは、置いてきぼりをつくらないことです。いま知り合いを訪ねてまわって、おせっかいで手を差し出すようにしています。

とにかく、住み続けられるふるさとであってほしい。そのために、国や行政への働きかけを、他人事と思わずにやってくれる人たちがいるのは心強いし、全国のみなさんとつながって頑張ればと思います。

共産党の志位さん、駆けつける



6日夜のミーティングに共産党委員長の志位和夫さんが駆けつけました(写真)。青年ボランティアの活躍にふれつつ、「バラバラにされて

きた人たちが、連帯の絆をつよめている。助け合って連帯して、人間らしい社会をつくらう」とあいさつ。志位さんが来るというサプライズに一時騒然となり、拍手がおきました。

温泉のなかで被災者と交流

毎日利用している温泉でのこと。地元の方にシャワーをゆずろうとしたところ対話に。自宅が全壊して、温泉にきていた方でした。

「家に赤紙がはられ、しばらく茫然としていた。共産党の議員さんが訪ねてきて本当に助かった」。支援制度の紹介パンフを手渡され、役立ったそうです。のぼせそうになるまで話はずみませんでした。